説教要旨「無力さの中でこそ」

使徒言行録　１４章　１～１８節

お盆というのは、あの世から“ご先祖様”をお迎えし、おもてなしをして供養をする風習です。ご先祖様を大切にすれば、ご先祖様が守ってくれる。そんな思いの裏には、先祖の祟りへの恐れがあります。浮かばれない先祖の霊が今生きている者を苦しめる。それを回避するために、ちゃんと供養をして先祖の霊を慰めなければならないのです。最近話題の霊感商法というのは、まさにそういった得体の知れない力への恐れにつけ込みます。身内が亡くなることが続いたり、病気が見つかったり、そういった不幸の理由を、「ご先祖様の祟りだ」などと吹き込み、供養のためにと高額な印鑑や、壺、あるいは数珠だとか、仏壇などというものを売りつけます。

パウロたちに生け贄を捧げて礼拝しようとしたリストラの人々の心にも、得体の知れない力への恐れと不安の思いがありました。だから彼らはパウロやバルナバのご機嫌とりをすることで不安を払拭し、もてなしの対価として恵みを受けようとするのです。

パウロとバルナバは、自分たちが神として祭り上げられることに抵抗し、ただ１人の本当の神について語りました。ただ１人の本当の神は、天地万物の創造者です。それは、人間が考えて造り出した神々や偶像、ましてや人間が成り代わることなど出来ない存在です。そして、イエス・キリストがあの十字架によってわたしたちに示して下さった神は、どんなときにもわたしたちに恵みを与え、わたしたちを喜びの内に生かそうとしておられる愛の神です。わたしたちがどんなに粗相をしようとも、神様に背こうとも、その恵みを豊かに注いでいてくださる愛の神です。何の対価をも求めない恵みが、今もわたしたちに注がれているのです。そして、神様が無条件にわたしを愛しておられることを信じることで、本当の平安を得ることが出来るのです。だからわたしたちは、神様の前で粗相をしないようになどとビクビクしなくてもよいのです。イエス・キリストを信じ、その恵みの下で生きるとき、わたしたちは祟りや災いを恐れる思いから解放され、平安と喜びに満たされた日々を得るのです。

（２０２２・８・２１　説教者：稲垣真実）